

バセレットの扉

Title - page by Berthelet

高野 彰

Akira TAKANO

要 旨

トマス・バセレットは・ウォードとピンソンの次代を代表する印刷者の一人である。彼は扉を囲み飾りという絵で飾ると共に、書名を図柄表示した。文字書名形でも書名を図柄表示している。彼も扉を「ページいっぱいに表示」したことは明らかである。とすれば扉を「ページいっぱいに表示」する表示原則は初期の英語本印刷者に限った特殊なものではなく、次の世代も踏襲した原則であったことになる。「ページいっぱいの表示」とは英語本の扉を表示する時の表示原則だったのではないだろうか。

1. トマス・バセレット

「ページいっぱいの表示」は初期の英語本印刷者にとって共通のページ表示原則であった⁽¹⁾。この原則を次代の印刷者はどのように位置付けたのであろうか。当時の印刷者についてプロマー (Henry R. Plomer) は「ド・ウォード、ピンソン、ジョン・デイ (John Day)、レジナルド・ヴォルフ (Reginald Wolfe) と同等の水準にあるばかりでなく、多くの点で彼らより優れた人物」としてトマス・バセレット (Thomas Berthelet) の名を挙げている⁽²⁾。この指摘に従って、本書でもド・ウォードとピンソン後の人物としてバセレットを取り上げることにする。

バセレットはウエールズ人で、ピンソンのところに弟子入りしたとされている⁽³⁾。そしてピンソンが死去すると、1530年に彼の跡を継いでバセレットは王室付き印刷者となった。彼は1528～55年にかけて本を出しているので、次代の印刷者の代表として例示して良い人物であろう。

2. 囲み飾り形

バセレットの名前は1526～69年に印刷された本に表記されている。しかしこの期間とは彼の名前が奥付や扉に表示された年号にすぎない。彼が自分の責任で印刷した最初の年は1528年であ

り、1555年9月には死去しているので⁽⁴⁾、本章ではこの期間に使われた扉の様子を辿ることにする。彼は1528年に本を出すと扉を囲み飾りで飾った。囲み飾りはその後も継続して使用され、最終的には204点に及ぶ。この数は扉表示全体(262点)の8割弱を占めるので、彼は囲み飾り形を扉表示の中心に据えていたことがわかる。

囲み飾り形とは「囲み飾り」と「書名等」を組み合わせた形である。彼は囲み飾りの図柄を約18種類使っている。この数も多いとは言えないが、さらにその内の11種類で196点もの扉表示をしているし、stc.862(1529年)及びその類似の図柄にいたっては60回も繰り返し使っている。一つの図柄とその類似図柄を重複使用していることから、バセレットは囲み飾りを多様に飾るためではなくて、扉の余白をとにかく小さくしようとして用いている様子がうかがえる。

加えて、囲み飾り内の書名等は、逆三角形、コップ、二重の逆三角形といった形で図柄表示されている。図柄表示をしていないのは3点にすぎない⁽⁵⁾。囲み飾り形も「ページいっぱいの表示」を目指していたことは明らかである。

3. 囲み飾り形 (1528～1533年)

しかしバセレットは囲み飾り内の書名を必ずしも一定の行数で表示しているわけではない。当初(1528～33年)、書名は平均9行で表示されるが、3行、4行、5行といった少数行・少単語数の書名もかなり見かける。

少数語書名の典型例として1単語書名のstc.18393(1531年)を見ると1語(svrveyenge)を2つに区切り、さらに「きずた」(hedera)を加えて逆三角形にしている。stc.18393(1531年)では2語(Natura breuium)で3行にし、「きずた」を加えて4行に表示されている。これまでも1単語や2単語の書名を見かけたが、そうした場合、ド・ワードは木版を併用したり、囲み飾り形の場合は詩などを追加して「ページいっぱいの表示」に務めてきた。ピンソンも当初はstc.16117.5(1506年)のような1行書名だと絵と併用して「ページいっぱいの表示」に務め、図柄表示を本格的に使い出すのは1518年頃からのことになる。しかしバセレットは少数語の書名であつても最初から「ページいっぱいの表示」が可能と考えていた。彼は図柄表示が絵と同等の機能を備えていると理解し、その特徴を十分に活用したといえる。

4. 囲み飾り形 (1534～1555年)

ところが1534年になると書名表示に変化がでてくる。1533年以前の少数行書名本が後続版を印刷すると、すべての扉が表示行数を増やし出すからであり、増行には(1)副書名等、(2)大型活字、(3)印刷事項、(4)印刷年(1行)を追加する、4方法がとられた。

しかも増行は少数語書名だけではなかった。行数の平均値も 1533 年までとそれ以降とでは 9 行から 12 行に増えている。そしてすべての扉に内容説明文、大型活字、印刷事項あるいは印刷年が追加されるようになる。おかげで 1534 年以降の囲み飾り内からは少数語表示が消失し、「仮想」ではなく、実質的にページを埋める動きに変わってくる。

5. 文字書名形 (1529 年～)

文字書名形は囲み飾り形より 1 年遅れて 1529 年から使われ出し、1555 年迄で 57 件に用いられている。この件数は扉表示全体 (262 件) の 2 割強に当たる。絵付き形は 1 件しかないので、バセレットは囲み飾り形と文字書名形の 2 種類で扉を表示しようとしていたことになる。文字書名形も、囲み飾り形と同様に、1533 年までとそれ以降とでは表示行数に大きな変化が現れる。1533 年までは約 8 行であったのが、それ以降は約 12 行と大幅に増加するからである。行の増やし方は 1533 年からだと印刷事項を追加する方法が目が付くが、その後は内容説明などを追加して表示行数を増やす形に変わってくる。そして 1543 年頃からは印刷年を追加表示する形が目立ってくる。文字書名形の最少行数は 4 行が 1 件、5 行が 4 件であるが、いずれも 1533 年までであり、それ以降は 9 行 (stc.3002.7, 1545 年) が最少になる。行数に増減はあるものの、文字書名形も「ページいっぱいの表示」を目指していたことはいうまでもない。

6. 絵付き形 (1528 年～)

絵付き形は stc. 17034 (1529 年) の 1 件だけである。この扉は書名等が 3 行しかないのでそれを逆台形で図柄表示すると共に、下部には中ぐらいの木版を配置して十分に「ページいっぱいの表示」に務めている。それにもかかわらず、バセレットは 1529 年に 1 回使っただけで絵付き形の使用を中止し、以後全く見向きもしなくなってしまう。そして囲み飾り形の隆盛を見ることになる。

しかしこの移行はかならずしも流行のためだけではなかった。絵 (木版) は目立つ表示であるが、主題を主張するので、本の主題に合わせて使わないと、本の内容を誤解させる恐れがある。とって本の内容に併せて木版を毎回用意するのでは費用がかさむ。囲み飾り形であれば大半はその心配がない。しかも囲み飾りを使えばその分だけ表示スペースが埋まるので、余白が小さくなり、「ページいっぱいの表示」が楽になる。ここにも扉は「ページいっぱいに表示」しなければならないという暗示が読み取れる。

バセレットも扉を「ページいっぱいに表示」しようとしていたことは明らかである。この表示原則はド・ウォードやピンソンといった初期の英語本印刷者だけでなく、その後の英語本印刷者にも受け継がれ、遵守されたとみてよい。

7. 巻末の表示形

「ページいっぱいの表示」は他のページ表示にも影響を及ぼしたのであろうか。バセレットが巻末付近を表示した形の中で、ド・ウォードとピンソンに見かけない形がS1である。S1は最終活字ページの後に3白ページが残るので、その内で真ん中の1ページだけを埋め、残りの2ページは白のまままで済ませた形である。

バセレットは巻末付近を大別して2つの形で表示した。一つがC形やG形のように最終折丁の最終ページまで「ページいっぱいに表示」する形である。もう一つがH形、Q形、S形のように最終ページを白のままにした形である。この両者は177件と85件のなので、「ページいっぱいの表示」をする姿勢に変化はない。しかし後者は全体の1/3になることから、表示原則を少しゆるめ、中間の白ページは埋めるが、最後の1白ページであれば無理に埋めようとしていない。この方法を活用し、最小限の努力で3白ページを処理したのがS1である。3白ページの中で中間の1白ページを埋めればH形と同じになるので、最後の1白ページは埋めなくて済むからである。ド・ウォードやピンソンであれば、最後の白ページを絵（木版）で埋めたはずである。そんな努力をするより、あらかじめページ計算をしっかり行い、それでも白ページができてしまうのであれば、強いて埋める必要はないと開き直ったのではないだろうか。造本に対する姿勢がしっかりと確立してきたことがわかる。おかげで巻末に見かける絵はバセレットの印刷者マーク（17点）を含めて、わずか29点なので⁽⁶⁾、全体（262点）の1割に激減する。それはとりもなおさず印刷者マークを含めた絵が「ページいっぱいに表示」するためであり、飾ったり、宣伝が主目的で使われたわけではなかったことになる。

それに対して印刷事項は別の動きをした。彼は印刷事項を「奥付」（217件）、「扉」（32件）、「奥付・扉の両方」（8件）に示した。無表示は5件にすぎない。印刷事項は原則として奥付に示し、扉に示すのは奥付に表示する余地がない場合と扉を「ページいっぱいに表示」するために敢えて使う場合とに限定している。バセレットの時代に入ると、印刷事項が商売を促進するための必須事項となったことは明らかである。しかしその場所は奥付であって、扉ではなかった。

かたやド・ウォードやピンソンは巻末が文章で「ページいっぱいに表示」されていると、印刷事項を表示しないことが多かった。彼らにとって巻末付近に木版や印刷事項を示すのは白ページや余白を無くすためであり、自社の宣伝が主目的ではなかった。初期の印刷者にとって「ページいっぱいの表示」がいかに重い足かせとなっていたかがわかる。

8. 巻頭の表示形

バセレットが巻頭付近で示したページの埋め方はド・ウォードやピンソンの時代に用いられた表示形ばかりなので、いずれも「ページいっぱいの表示」をしていることになる。

巻頭付近の表示形は Y1 と Z2 が大半を占めている。ド・ウォードやピンソンが見せた巻頭付近の多用な表示は取束に向かっていることが分かる。扉ページと本文ページとの間に 1 白ページがあるかどうかで Y1 か Z2 となるので、本文ページをどのページから始めるかでは、まだ思案中の姿が浮かび上がってくる。しかし両者の件数からすれば、本文ページを表ページから始める様式 (Z2) が確立しだしたことが分かる。Z2 とは中間に 1 白ページが存在する形であるから、「ページいっぱい」の表示」をしている扉ページと本文ページに挟まれたページは「ページいっぱいに表示」したと見なす考え方が生きていることは言うまでもない。おかげで木版を使う Z1 は 8 件に激減し、巻頭付近でも木版を使ってページを埋める考え方が廃れだしてきている。

9. 「ページいっぱいの表示」

「ページいっぱいの表示」とは「実質的に」縦行いっぱい、横幅いっぱいに表示することである。この条件が厳しいことから、その緩和措置として、絵（木版）の併用が考え出された。しかし絵であっても、囲み飾りは絵と同じ機能を与えられなかった。そして方針が定まらなかったのが文字を使った図柄表示である。ピンソンは図柄表示を最後まで絵として扱うことにこだわり、1528 年に 4 行書名の図柄表示をしている。バセレットはこれを見て、図柄表示をすれば「ページいっぱいの表示」が可能と思ったのではないだろうか。彼は初期に少数行の図柄表示を多用するからである。しかしこの考え方が行き過ぎだと気付くと、1534 年からは多行表示に代えていく。それだけ図柄表示は絵（木版）に類似した表示形であったといえよう。

10. 逆三角形

しかし少数行から多数行に変えたからと言って、図柄表示の使用が減少するとは限らない。むしろ多数行表示が求められたことによって、図柄表示が一段と必須の表示方法になったからである。これまで図柄表示の典型として逆台形を多く見かけた。しかしこの形は意図的に多用されたわけではない。逆三角形とは最下部を尖らせる図柄であるから、わずか 1 文字で 1 行を表示できる。しかし単語とは音節単位で成り立っているので不用意に語尾の 1 文字だけを切り離すわけにいかない。この図柄は偶然に作れても、自由に作ることの出来ない図柄だったのである。逆三角形の側から言えば、最下行に 1 文字を表示できないために、やむを得ず作られた表示、それが逆台形であり、逆台形とは逆三角形の未成形であったといえる。stc.3507 (1525 年) は 3 行目にアスタリスクを 1 つ配置して、なんとか逆三角形にしようとしているが、形が悪い。stc.19081a (1518 年) だと、逆三角形にしようとして最下部に 2 文字を配している。1 字表示の難しさと、逆三角形作りの難しさを示す好例である。

他方、ド・ウォードは1525年から絵付き形で逆三角形を3回試みるが、目立った動きにならなかった。ピンソンは1518年から逆三角形でも表示しようとして、最下行を2文字や3文字で示しながら模索を続ける。そして文字へのこだわりを捨て、「きづた」(hedera)さらには逆三点アスタリスクといった記号活字を使うことで、逆三角形を自由に表示できる図柄とした。逆三角形にこだわるのは形の良い図柄であると同時に、簡便に増行できる形だからである。1行でも多くそして簡便に表示しようと努力している様子がよく分かる。初期の印刷者たちは、当初、扉を文字だけで表示しなければならないと考えていたように見える。

しかしバセレットが最下行に記号活字を使うことで悩んだ様子はない。彼は最初から最下部に「きづた」や星印(アスタリスク)を使っている。3~5行の少数行(13件)の内で最下行に記号活字を配置したのは9件もあり、記号活字を使っていないのは4件にすぎない。彼は「図柄」表示の特典を最大限に活用して文字表示をしたことになる。当初、彼は図柄表示に絵(木版)と同じ機能があると思っていた。その後、縦行をできるだけ埋める必要が出てくると、それまでにも増して図柄表示を活用してその目的を達成している。その主たる表示形が1字(記号)で1行が埋められる逆三角形であった。

11. 最後に

初期英語本の印刷者の中であって、主要な人物であると共に、扉を採用した人物とえばド・ウォードとピンソンである。彼らは早々に扉を採用すると共に、そこを「ページいっぱいに表示」した。この表示の基になったのが扉ページを本文ページと見なす考え方である。この発想に立つと、扉ページの表示は困難を極める。そこで彼らは余白を埋めるために絵(木版)、囲み飾り、小図柄、吹き流しと言った絵の類から、目次、内容説明、印刷事項のような文字類まで駆使する。そして最後に文字を使った図柄表示に行き着くことになる。

「ページいっぱいの表示」は扉ページに限った問題ではなかった。巻頭付近でも、巻末付近でも起こっていた。しかも巻頭や巻末だと白ページが多発することから、それらのページを埋める動きも派手になり、時には絵(木版)を何ページにも渡って見かけることになる。そのためプロマーはド・ウォードらが不節操に絵(木版)を使うとか、ベネット(H.S. Bennett)は扉ページが宣伝のことを考えれば簡潔であるべきだと非難した⁽⁷⁾。しかし歴史を解明しないままになされた発言も近年、スミス(Margaret M. Smith)によってとどめを刺された感がある。スミスは「ラベル書名(即ち、少数行書名)+木版」順の表示、木版を併用した「ページいっぱいの表示」という重要な指摘をし、扉を「歴史的に」解明しようと試みているからである⁽⁸⁾。

初期の英語本印刷者にすれば扉ページとは本文ページであった。そのために彼らは「ページいっぱいの表示」(fill up)に努めた。決してごたごた(crowded)表示しようとしたわけではない。

しかもこの考え方は初期の印刷者に限ったことではなかった。彼らの跡を継いだバセレットも同じ考え方に立って試行を続けるからである。「ページいっぱいの表示」とは英語本の扉を示す時の表示原則だったのではないだろうか。

本稿は「平成 23 年度跡見学園女子大学特別研究助成費」による成果である。

注

- (1) 高野 彰「白への恐怖、黒へのあこがれ」(1~4)『跡見学園女子大学文学部紀要』第41号(2008)、42(2)号(2009年3月)、43号(2009年9月)、44号(2010年3月)、「扉を開けるピンソン」(1~2)『跡見学園女子大学文学部紀要』第45~46号(2010年9月~2011年3月)
- (2) Plomer, H.R. *Wynkyn de Worde & his contemporaries, from the death of Caxton to 1535*. London, Grafton, 1925. p. 223.
- (3) do. p. 224.
- (4) Duff, E. Gordon. *A Century of the English book trade*. London, The Bibliographical Society, 1948. p. 11.
- (5) 1534年以降の4行書名(stc.16940, 1535年)は1539年の後続版(stc. 16941)で引用句を加えて9行表示となる。5行表示は2点あるが、1点(stc. 10996, 1540年)は後続版が2回出て、その2回目(stc. 10999, 1548年)の時に印刷年が2行追加される。しかしもう1つの本(クセノフォンの著作)(stc. 26071, 1537年)は後続版が2回(1544年と1550年)出るが、いずれも5行表示に留まり、最後まで行数増はない。1534年以降でも少数行の書名本が後続版を出せば、書名の行数を増やしていることがわかる。
- (6) バセレットの印刷者マーク(図10-7-1)は次の本で出てくる。
stc. 1537, 2055, 7659.5, 7674, 10500, 10751, 12436.5, 12437, 12438, 12559, 14639, 15605, 15610.7, 18109, 21598, 21599, 21681
- (7) Bennett, H.S. *English books & readers, 1475 to 1557*. Cambridge, At the University Press, 1970. p. 213.
- (8) Smith, M.M. *The title-page: its early development, 1460-1510*. London, British Library & Oak Knoll Press, 2000. p. 89.

